第7章 2要因分散分析・χ^2検定

サンプル論文4

異性との交際経験が同性友人との関係観におよぼす影響
― 大学生を対象として ―

問題・目的部分の要約

青年期における異性との交際経験は，精神的安定や自己成長，アイデンティティの形成などの自己に関する側面に影響することが指摘されている。また，異性との関係構築に関する考え方への影響も従来の研究で指摘されてきている。これらの知見を踏まえると，青年期における異性との交際経験は，影響力の大きな学習経験といえよう。異性との交際が人間関係のひとつの形態であることを考えれば，その経験はさまざまな人間関係へも影響をおよぼすであろう。では，同性間の関係に対する影響はどのようなものなのであろうか。本研究は，交際経験が同性との関係観におよぼす影響について検討することを目的とする。また，他者との関係の取り方については性差があるといわれており，この点も含めた検討を行う。

方　法

2015年10月から2016年2月にかけて，全国の10大学（中国1，四国1，関西3，中部3，関東2）に在籍する大学1年生を対象に調査を実施した。高校生を対象としたいくつかの調査（少年青年協会，2003；小田，2009；中西部新聞，2013など）から，交際経験率は男女ともに40％程度と考えられる。大学生になると交際範囲も広くなり，交際経験者の比率がさらに高まるだろう。そこで今回は，対象を入学後まもない1年生（前年度に高校を卒業した，18歳もしくは19歳の者）に限定した。具体的な実施方法は，各大学に所属する教員に調査を依頼し，授業等で調査目的等を伝え協力者を募った。協力を申し出た対象者に調査用紙を手交し，回収は質問紙に添付した封筒による郵送で行った。回収できたのは

361 部であった。

調査内容は，大学名，性別などの基本属性と，交際経験の有無，同性との関係観である。同性との関係観については，長期的関係観，妥協的関係観，融合的関係観の 3 つの側面についてたずねた。長期的関係観は，田中（1994）の研究で検討された，11 項目から構成されている尺度である。将来指向的な恋愛観を人間関係観に応用したものであり，短期間で終わるのではなく，長期にわたって関係を維持，継続，発展させようとする意識を測定するものである（項目例「今の友人とは，この先もずっと一緒にやっていきたいと思う」）。妥協的関係観と融合的関係観を測定する尺度は，Brown（1979）や Jones（2000），Kent, et al.（2002）などの作成した友人関係等に関する尺度を統合的に検討した佐々木（2008）によって作成され，信頼性と妥当性が検討された尺度である。妥協的関係観は，友人関係の維持や発展には，相手への配慮や妥協が必要だとする意識を測定するものであり（項目例「友人との関係においては，お互いが少しずつ譲り合うような気持ちも大切である」），融合的関係観は，気持ちや価値観，行動の一致を関係の中に必要とする意識を測定するものである（項目例「仲間や友人には，自分のすべてを知ってほしいと思う」）。両者ともに 10 項目で構成される。本研究では，全体的な統制をとるために，用語，文末表現等に若干の修正を加えたうえで，これらの項目を利用した。なお，対象を同性に限定するため，「同性の親友や友人，仲間についての，あなたの考えをおたずねします」という文言を教示文に挿入している。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」の 7 段階で求めた。なお，得点化は，「あてはまる」場合を 7 とし，「あてはまらない」に向かい 7 から 1 を与えた。逆転項目は，それと逆の点数を与えた。

結　果

回収された 361 部のうち，記入漏れなどのない 359 名の回答を分析に用いる。男女別の交際経験の有無は，Table 1 に示す通りであった。高校生を対象とした調査結果（少年青年協会，2003；小田，2009；中西部新聞，2013 など）よりも，若干高めの経験率といえるだろう。性別と交際経験の関連を検討するために，クロス集計表の独立性の検定を行った結果，有意な偏りが認められ（$\chi^2(1) = 4.37, p < .05$），男性で交際経験あり群が多く，女性で交際経験なし群が多かった。

Table 1
男女別交際経験

	交際経験なし	交際経験あり	合計
男性	80（.49）	82（.51）	162
女性	119（.60）	78（.40）	197
合計	199	160	359

次に同性との関係観の各尺度について検討する。これらには，それぞれオリジナルの項目に若干の修正を加えたので，まずすべての項目について回答の分布の様相を検討したが，特段の留意が必要な項目は見当たらなかった。さらに，それぞれの尺度ごとに項目間相関を検討し，α 係数および ω 係数を求め

たところ，「長期的関係観」では α=.77，ω=.81，「妥協的関係観」では α=.76，ω=.80，「融合的関係観」では α=.83，ω=.86 であった。これらの検討からは不適切な項目は認められず，α 係数もオリジナルの研究で認められた係数とほぼ同程度といえる。本研究においてオリジナルの項目に一部改変を加えたが，その影響は大きくないと判断し，全項目を用いてそれぞれの尺度の得点を項目平均値として算出した。「長期的関係観」の平均値は 3.84，標準偏差は 0.93，「妥協的関係観」の平均値は 3.89，標準偏差は 0.95，「融合的関係観」の平均値は 3.93，標準偏差は 1.05 であった。また算出された得点間の相関係数を求めたところ，「長期的関係観」と「妥協的関係観」の間で .44，「長期的関係観」と「融合的関係観」の間で .30，「妥協的関係観」と「融合的関係観」の間で .49 であった。

続いて，経験と性別による同性との関係観の差異を検討するために，各尺度の得点について経験の有無と性別を要因とする 2 × 2 の分散分析を行った。その結果の概略を Table 2 に示す。

まず「長期的関係観」においては，有意な交互作用（$F(1,355)=8.57$, $p<.01$, $\eta^2=0.02$）と，交際経験の主効果が認められた $F(1,355)=5.60$, $p<.05$, $\eta^2=0.02$）。交互作用が認められたこと，および平均値の差異から，男性は交際経験の有無にかかわらず同程度の得点であるが，女性は，経験なしの群よりありの群の得点が高くなるといえる。次に「妥協的関係観」では，有意な交互作用，主効果とも認められなかった。最後に「融合的関係観」については，性の主効果（$F(1,355)=6.93$, $p<.01$, $\eta^2=0.02$）が認められ，女性の平均値の方が高いことが示された。ところが交際経験の主効果は認められず，このような同性との関係観は交際経験によって変化するものではないといえる。

Table 2
性・交際経験と同性との関係観との関連

		男性		女性		性別の	交際経験の	
	交際経験	*M*	*SD*	*M*	*SD*	主効果	主効果	交互作用
長期的関係観	なし	3.84	0.88	3.67	0.96	1.49 *ns*	5.60 *	8.57 **
	あり	3.78	0.86	4.19	0.92			
妥協的関係観	なし	3.87	0.96	3.83	0.91	2.25 *ns*	1.07 *ns*	3.60 *ns*
	あり	3.78	0.96	4.13	0.95			
融合的関係観	なし	3.84	1.02	4.04	1.00	6.93 **	0.08 *ns*	0.69 *ns*
	あり	3.72	1.03	4.10	1.12			

（以下，略）